

Eureka XI

六年制通信 No.26 令和5年11月17日(金)号

好きなことをして生きていけるか

好きなことだけをして生きていきたい。誰でも一度は思ったことでしょうか。しかし、そもそもその好きなことが見つからない、自分がいったい何を望み、何に向いているのか、それすら見つけられないでいる、そんな若者も多いのではないのでしょうか。若者の持つ、将来に対する不安というのは、実はそんなところにあるのだと思います。目標を持つようになった友だちをうらやましく感じ、劣等感を覚えるのもこの時期です。しかし、それも悪いことではないですね。青春が終わり大人になるころ、何を学んでいるべきなのか、それはたくさんあるでしょうが中でも大切なのは、世の中は思い通りにはならないということを知ることでしょう。自分の限界を知って、望んでも得られないこともあるのだということを理解し、それでも思い通りにならない世の中を生きていく覚悟をもつことが、青春時代に培うべきことだと言えるのですから。

好きなことをして生きる。これも大きな才能だと、その事例は私には少なくとも二人思いつきます。大谷翔平選手と藤井聡太八冠です。このお二人の共通点は、圧倒的な実力です。大谷選手の二刀流は、初め不可能だと言われ、プロのOBたちには批判さえ受けました。しかし、その人たちを沈黙させるほどの実力を示してきたのです。そのために彼が行っている食事や睡眠、体のケアなど日々の摂生は私たちには到底できないものでしょう。それを平然と行えるのは、大好きな野球に最高の状態で臨みたいという、子どもの頃から変わらぬ姿勢に違いないと思います。藤井八冠は、どれだけタイトルを獲っても決して驕ることなく、ただただ強くなりたい、もっともっと強くなりたい、そう思っているようです。こわっ。藤井八冠の祖母の詠まれた歌―「負けました」深く礼する十五歳その胸襟をあかすことなし―の胸襟には、負けてもちろん悔しいでしょうが、勝ち負けを越えた強さを求めている意志があると思います。好きでなかったら、決して到達することのできない領域に達しているのですね、きっと。

野球だけ、将棋だけ、それだけやって生きていく。あとは何もなくてもよい。幸せそうに見えますが、これは圧倒的な実力があってのことです。今の君たちが、例えば英語が好きだから他の教科を捨てて英語だけをする、そんな次元と同じだと思ってはいけませんよ。君たちは好きなことをするために、先ず大学に入る必要があるからです。森重文というフィールズ賞受賞の数学者がいますが、高校時代から『大学への数学』(まだあるよね)の最後の懸賞問題(トライしてごらん)に満点を取り続け、編集者の誰もが東海高校の森君という名前を知っていたという大秀才です。これくらいの生徒なら、あるいは数学だけをしていても止めようがないかもしれませんね。

大学に入って好きなことを勉強する。そんな例は山ほどありますが、私が感動したのは木田元先生の話です。19世紀の末にドイツに生まれ、20世紀を代表する哲学者となったハイデガーの代表作は未完の大著『存在と時間』(Sein und Zeit)ですが、この本を読みたいという、ただそれだけの理由で木田先生は大学に入り、やがて哲学の教授になりました。著書の『闇屋になりそこねた哲学者』を読むと、人間は好きなことならこれほどの勉強ができるのだということに感動します。大学に入って念願のハイデガーを読むわけですが、一読して自分には分からないということが分かった、と言っておられます。そしてそこからまた勉強が始まるわけですね。ハイデガーが分かるには、フッサールもカントもニーチェも分からなければならない、ということが分かるわけです。ハイデガーについてやっと何かを言えるようになるには30年を要したとのこと。上に挙げたのは別の本で、先生は好きなことをして生きるのが一番だとしながら、若者に対して次のように言っておられます。……好きなことをして生きるには、まず自分の好きなことを見つけなければなりません。「やりたいことが見つからない」「好きなことがない」などという若者がいますが、なにかを好きになるとするのは、努力して身につけるべき能力なのです。……つまり、好きなことは努力して身につけるのだと、それは一種の能力だと言っています。また、与えられるものが多いと、心から欲求するものが少なくなるからよくないと警鐘を鳴らしておられますが、これはむしろ親や教師に耳の痛い話ですね。若者は目標ができれば、あとは一所懸命に勉強するだけです。その努力は自分の人生を変えてくれます。そして自分に圧倒的な実力がついたとき、初めて好きなことをして生きていけるのでしょね。

今週のおすすめ

・川村元気 『世界から猫が消えたなら』 (小学館文庫)

猫を愛する郵便配達員。三十歳独身。ある日脳腫瘍で余命宣告を受ける。しかもあとわずかししか生きられないとのこと。俺は何か悪いことをしたのか。打ちひしがれる僕の前に僕と同じ姿をした悪魔が陽気に現れ言うには、実は明日あなたは死にます、と。しかし私と取引に応じれば生きられます。何か一つをこの世から消せば一日寿命が延びます。さあ、どうしますか。ちなみに、その一つというのは悪魔が提案するのです。ここ、ちょっと嫌なところですね。自分で決められるのなら何日でも寿命を延ばせそうなのですが…。悪魔の提案通り電話や映画や時計をこの世から消しながら僕は自分の人生、やり残したこと、心残りなこと、それらを考えていく。レタスという名の猫との思い出と、キャベツという名の猫との今の暮らしも随所に語られます。母の死以来の父との確執、元恋人に母が渡していた手紙(これ、ちょっと泣けます)、それらも詳しく語られます。家族とは何か、これもこの本のテーマですね。

この物語は僕と猫と悪魔の一週間の物語です。最後、悪魔の提案は世界から猫を消すこと。その代わり僕は一日長く生きられる。さて、僕はキャベツのいない生活を選ぶことができるのか。僕がどんな決断をするのか想像しながら読んでみて下さい。

BGMは 朝ドラ「ブギウギ」の ハッピー☆ブギ でした…。